

令和紙



おりおりの記

ケンブリッジの思い出

日本取引所自主規制法人
理事長

細溝 清史

1979年から81年まで英国ケンブリッジ大学に留学した。当時はそもそも修士課程がなかったので経済学部で学士入学した。秋から冬にかけて日はどんどん短くなっていき、冬至の頃には午後3時くらいから暗くなりだし、昼間も厚い雲が垂れ込めていて寒く重苦しい冬を経験した。道路は凍結し、車のブレーキは車輪を止めるもので車自体を止めるものではないことを覚えた。冬至を過ぎると一旦死んだ太陽が再生したかのように日がだんだんと長くなっていく。イースター休暇のあとメイポールの頃にはすっかり暖かくなり、長かった冬の鬱憤を晴らすかのように遅くまで日の光を浴びて学生達は大騒ぎをしていた。ケム川に底の平らなパントという小舟を浮かべ艫に立った人が棹で川底を突いて進んでいく。川の両側には大学の建物を通りすぎると庭や草地在り、クロッカスや水仙が咲き乱れている。家族や友人達とパンティングをし郊外の芝生の上で一休みしてから戻るというのが週末のルーティンだった。

ゴルフは初めて一度だけ留学生仲間とやった。郊外のパブリックコースでパブを大きくしたようなクラブハウスで道具を借りて手引カートで18ホール回った。ラフは深くてボールは真上に立たないと見つからない。ボールは1ダース買ってコースに出たものの途中で全部無くなってしまい、クラブハウスまで買いに戻って何とか18ホール回っ

た。後からくる組を全部先に出していたので我々が上がった時にはその日プレーしていた人達が「今日はへたな外人がプレーしてたな」な

どと談笑している。それ以来ゴルフはせずテニスをやったが、当時もっとゴルフをやっておけばよかったと思っている。

ケンブリッジでは個人教官が毎週テーマを決めて多くの参照論文を指定する。それらを読んだ上で自分の考えをレポート用紙1枚程度にまとめて、前日までに提出しないと授業（1時間、先生1人と学生2人での討論）に参加できない。こうした個人指導が週2科目くらいあり、その合間に講義を聴くという生活であった。経済学も日本で一般的な米国流ではなく英国流で「完全雇用は市場だけでは減多に達成されず、政府が需要調整をするべき」といった考え方が強かった。「ケインズは死んだ」と言われていた時代であったが英国ケンブリッジでは「生きていた」。「市場は必ず失敗する。政府も失敗する。重要なのは同時に失敗しないことだ。」と思っている。

